tome international art triennal

寄稿

対談

作家略歴

STAFF

協賛

寄稿文

幾何学的構成の余白で

Thinking of Geometric Composition

東京外国語大学教授
松浦 寿夫
Hisao Matsuura
Professor at Tokyo Foreign Language College

幾何学的構成という語は、20世紀の美術史の文脈では頻繁に用いられる語のひとつである。多くの場合、近代美術の歴史は様々な流派の交替の歴史として記述されかねないが、その流派的な交替の歴史の様々な場所で、幾何学的構成と呼びうる徴候をみいだすことはできる。ということは、外見的に幾何学的構成という様相を示していたとしても、この「幾何学的」および「構成」という形式的な特性に投影される意味は大きく異なっているかもしれないということだ。

それは、幾何学的構成という共通の課題を設定した今回の登米アート・トリエンナーレの出品作品群にもいえることだ。「幾何学」、「構成」という共約項を持ちながらも、個々の作品は互いに明確な差異を示していたはずである。とはいえ、幾何学的な構成という課題は、制作の場面で、大きな制約を課すことにも注目しておかなければならない。つまり、構成作業の単位がきわめて限定的であるということだ。この制約のゆえに、用いられる単位それ自体の偏差は微小化し、必然的に、この単位を物理的に提示する際の素材、および、単位の連結様態により大きな偏差が現れてくることになるだろう。

では、このような自己抑制的な限定という賭金は何をもたらしてくれるだろうか。われわれの身の回りに純粋に幾何学的な形態を見出すことはできないし、世界はごく端的に、非幾何学的な混沌とした細部に満ち溢れている。幾何学的な単位への還元作用によって、世界の微細な揺れ動きを取り逃すことにはならないのだろうか。この問いを前にして、おそらく構成的な原理によって作品を基礎付けようとする美術家は、厳密な単位の設定と諸単位間の連結作用とによってこそ、世界の小さな揺れを補足することを試みると答えるであろうし、また、逆説的に、厳密な定式化を遂行しようと試みる者だけが、この無数の世界の微細な揺れ動きを際立たせることができるという確信を表明することだろう。

The word GEOMETRIC COMPOSITION is one of the words that have been used in the content of the art history in the 20th century. In most cases when the history of modern art changed, it was the time when new schools of arts were born and they changed its history. And when the history changes, we can see the sign of geometric composition in many works of arts. It seems that each work of art may have had their own geometric composition. But is it possible for us to think that each work of art may have their own geometric composition ?

The same thing is true for the works exhibited at TOME ART TRIENNAL, though the geometric composition is the subject in common.
At the same time, we need to notice that the common subject of GEOMETRIC COMPOSITION may impose restraints in the production of each work of art. That is, it means the idea of composition of each artist is apt to be restrained.

Because of this kind of restraint, there may be a little difference among the works of the artists. In order to stand out the difference of each work, it may be important for each artist to use their own materials, or to think of their unique composition and so on, then eventually big differences will appear among the works.

What will the restricted common subject GEOMETRIC COMPOSITION give us ? It may not be possible for us to find something that has geometric shapes easily around us. In this world, there are few geometric shapes around us.

By focusing the subject on GEOMETRIC COMPOSITION, doesn't it mean that we may miss the slight changes of the world around us ? For this kind of question, some artists who produce works with fundamental principles may answer that they will try not to miss such changes by thinking of their own composition in detail or thinking the detailed way of combining the materials.

Paradoxically speaking, only the artists who will try to execute the focusing the subject on GEOMETRIC COMPOSITION may strongly believe that they may be able to stand out the slight changes of the world.

寄稿文

佇まいもしくは結界としてのアート

Still Appearance Or Art works as the"Siimaabandha"

立教大学文学部教授
千石 英世
Hideyo Sengoku
Professor Faculty of Literature,Rikkyo University

2010年の夏は日本中が猛暑にあえいだ夏だった。東北とめ市も例外ではなかった。<幾何学的抽象アート>に特化した珍しいアートフェスティバルが開催されると聞き、市を訪問したときは、アーティストの一部はなおも作業のさなかにあった。制作現場に歩みよると、皆、例外なく皆真っ黒に日焼けしていて、白い歯を見せて迎えてくれた。作品の多くが野外作品であって、加えて、制作現場も見てもらおうではないかというのだった。

アートで町おこしとは、近年しばしば耳にすることばだが、<幾何学的抽象アート>に的を絞ったものは稀であろう。それも、一地方自治体とその市民の発意によって企画運営されるというのも稀である。背後に大きな資本や大きな官僚機構が透けて見えるというありがちなアートフェスティバルではなかった。

印象に残った作品をあげてみよう。僕がかってに(そして、ひそかに)「とおりゃんせ」と名付けているマッサオな青竹を使った松宮作品。人の身長の数倍もあろうかという青竹を逆Uの字に組んだものを豊川稲荷の連続鳥居のごとく並べた作品、鑑賞者はその鳥居の下をくぐりぬけてゆくのだ。

同じく「光れ、正多面体」。人体ほどの高さからなる立方体が二つ、森のなかで向かい合って立っている。そして各立方体の前にほっそりとした棒が各1本立っている。と見えて、近づいてみると、立方体の壁面に垂直にスリットが切り込まれているのである。そのスリットから奥を覗き見ると何やら発光装置とおぼしきものが見える市野作品。深夜に光を放つという。

同じく「透ける星空」。あれは何角形なのか、ブリキ板を組み合わせてできた狭隘なる人工回廊。肩をブリキ板の壁にこすりつけながら歩幅小さく一周すると20~30秒ほどかかる。と、その途中に人体一人分ほどの空白がぽっかりと開いている。そこから、いわば中庭に降り立つことができる中川作品。作品のメッセージによれば、中庭は人体一人分の空っぽのスペースになっているので、そこに仰臥せよという。ぽっかりと空が見えるはずというのだ。たしかに見えた。夏の空だった。夜に来て同じことをせよともあったが、その機会は持てなかった。

同じく「大地の鍵盤」。ゆるやかに傾斜する緑の芝生に黒色に近い茶色の枕木が並べられている。枕木は重量感を放ち、引き締まっている。地面にのめり込みそうなのだが、中空に浮いてもいて、一つの諧調を作る高山作品。同じく「さざ波に揺らぐジャングルジム」。宇宙要塞を思わせる祝祭劇場の前庭には、水盤ともいうべきプールがある。空と劇場の壁面を映す透明な水が張られている。その透明に浸かって角材を組み合わせた斎藤作品。さざ波に足元を洗われている。

他にも印象に残った作品は色々あったが紙幅が尽きた。今後3年に一度のトリエンナーレ形式をとるという。アート作品は、アートだけを鑑賞するのでは多分ない。それが置かれた周囲の佇まいをも同時に味わうものだろう。いや、アートを置くと周囲が佇まいとなる。

It was extremely hot summer all over Japan in 2010, of course it was not any exceptional in Tome city even in Tohoku District. I heard that a very unique art festival of specially featuring geometrical abstract arts took place in Tome.
When I visited the spot, some of the artists were in the mid of their production.

I walked to them, met and greeted, every artist was well sun turned and showed their big smile. Many of their works were for out door and they showed how the artworks would be built up.
The word"City appeal with the arts"is recently quite familiar to us. But focusing on

<Geometrical Abstract Art> is very unique. Also that the event was planned and run by a local community and an individual was very rare. At least, this event was not the common one which was backed by a big capital or bigger government.
Let me show some impressive works.

The works built with green bamboos by Mr.Matsumiya(I secretly named "Letting you pass").This work, a lot of bamboos(much longer than mankind) were crossed tied into up side down of "U" letter and set continuously like the tunnel of shrine gate (called Torii in Japanese) in Toyokawa Inari. People can see the works passing inside it.

" Shining square box " by Mr.Ichino was fun. Two square boxes were situated facing each other in the woods. In front of the boxes, it looks slim stick is standing…but actually you can see there is a vertical slit on the wall ! You can also peep the slit and see that there was something like a lighting machine in the depth of the box. It's said that this box shines during the midnight.

" See-through star night " by Mr.Nakagawa. How many angles did that shape have? The work had very narrow passage which was constructed of tin plates. I walked the way around rubbing on the wall taking 20~30second,then found an open space. Finally you can step into the centre. The message said that it's extent was just for a person and you would lie on your back in the empty space then you would see the sky. Surely I did so and saw the summer sky. The message also said you could do the same thing in the night time, though I was not able to do so.

"Key board on the earth." By Mr.Takayama. Dark brown colored cross-ties were laid on to the green grassed slope. The ties looked heavy and firm, seems to sink into the earth. On the other hand, actually the ties are floating in the air and creating a melody.
"Jungle gym on the ripples" by Mr.Saito. This work is made of woods, washed away by the clear water reflecting the sky and the wall in the pool in front of Tome Shukusai Gekijo (Tome Festival Hall) ,looks like a space fortress.

I'm afraid there is no more room to describe about other works. This art festival will be "Trienal" event, takes place once three years. The "art" is not only an art works itself, not only to show/see the art works, but also to enjoy the appearance or the atmosphere of the place where the works situated. From the moment of the settlement of the art works, the simple yard becomes the "still appearance".

トリエンナーレ座談会「トリエンナーレがもたらしたもの」

開催日	2011年2月28日(月)
出席者	[コーディネーター] 永浦　敬悦(登米市教育委員会理事) [パネラー] 及川　幾雄(トリエンナーレ実行委員会事務局長)　村上　俊(河北新報社編集局記者) 佐藤千賀子(サポーター、中田婦人会・祝祭劇場友の会)　野家　数夫(登米市中田生涯学習センター副所長) 佐藤　輝子(サポーター、市観光協会おもてなし推進員)

コーディネーター：本日は「トリエンナーレがもたらしたもの」と題しまして、それぞれのお立場からご意見を頂戴したいと思いますが、まずはじめにプランナーでもあり、事務局長の立場で大きな役割を担っていただきました及川さんにお話をお願いします。

及川：美術教育の話になると思うんですが、アートというのはガラス越しに観るような感覚では・・・というのがありました。また、幾何学構成作品を収蔵するサトルミュージアムを他のアートと一緒にするものではないんじゃないかっていうジレンマもありました。

その中で現代アートは、高尚なもの、難解なものまで一緒にしてくれる親しみのあるものなんだ、ということを感じてほしいという思いが以前からありました。だからトリエンナーレとして野外で作品に触れるっていうのをやりたかった。しかし、準備は想像以上に大変でした。

会期中に家族と会場を周ったんですが、作品と作品の間にある風景は、今まで見た事がないものでした。家族で「登米市ってきれいだね。」って会話してたんですよ。「もしかして登米市っていいかもね、きれいかもね。」というような再認識をしたわけです。

及川 幾雄

終わってみて実感したアートの力

コーディネーター：実は、登米アートトリエンナーレは、三年前より市民の間でその思いや願いが温められてきて今年になってようやく実現し目標が達成されました。

このような経過の中で実現されたトリエンナーレですが、いよいよ始まってみますと、それは大変壮絶な戦いといいますか、事務局内での分裂、分解の危機が何度もあったというくらいに、それは並々ならないものでもありました。

そんな中で、ボランティアによる専任事務局と中田生涯学習センター職員が一体となってなんとか切り抜けてきたという状況で、結果的にはこれらの全てを乗り越え、大変すばらしいトリエンナーレができたというふうに思っています。

今回のトリエンナーレを総括してみますと大きく2つ上げられると思います。

一つは、今、登米市が掲げています協働によるまちづくりが実現できたこと。協働による形態の典型例となったのではないかと思っています。

もう一つは、制作・展示された現代アートによってアートと人、人と人がつながったということです。

この姿が随所に見られ、アートの力というものを感じさせられたのですが、このような空間の創造は、これまで私たちが見慣れてきた風景とか景観に変化が与えられ、登米市の新しい魅力になったように思います。

皆さんは、いかがでしょうか。

佐藤（千）：終わってみれば自分たちの力で重大なことをやり終えたという満足感や達成感を感じ、やり終えたという充実感でいっぱいでした。

佐藤（輝）：会場を案内する中で、その地域の歴史なんかも一緒に入ってきたんですね。だからそういうこともすごく参考になりましたし、心が豊かになったように感じました。

村上：現在、仙台市に住んでいるんですが、ミュージアムができた2007年当時、登米市に勤務していたこともあり、友の会の前身となる市民ギャラリー推進会議の設立に関わらせていただきました。記者というよりは登米市の一市民としてでした。

今回のトリエンナーレは一言でいうと感慨無量。ようやく花開いたかというところで、一般の観客よりも思いやりをもって観させていただけたという気がしています。

僕が観に来たのは暑い日でした。ひととおり会場を周り、景観とマッチングしている作品が非常に印象に残っています。ネッカーキューブという作品は、どこか異次元から迷い込んできた帆船みたいな、その奥に田園風景が広がってるというのは非常にいいんじゃないかなと思いました。丁度その時に近所のおばちゃんが普段着姿でいたのがとても絵になっていて、これがひとつのトリエンナーレの完成形という気がしました。もうひとつは旧水沢県庁記念館の前の三角の作品です。明治時代木造館に新しい価値観が加わった意味ではとてもよかった。

村上 俊

及川：市博物館前を通勤していて、今は何も無い芝生を見るんですね。トリエンナーレが始まった当時、高山さんの枕木が現れ、角には北川さんの斜め30度の作品があって、ちょっと目をこらすと丸い作品があって、そして、季節が少しづつ変わっていって雪景色の作品が観れて、それが今はなくなっている。あるのが当たり前だったのが

今は無い。それがかえって違和感を覚える。これがアートの力なんだと感じました。仙台市にあるインキュベーションセンターでは、登米市ってトリエンナーレをやってるところですねって皆知ってるんですね。驚きました。なかなかつながらなかったのに、仙台に行くとつながっている。登米市をPRできたかなと、嬉しく思いました。

野家：私たちは、迷うこともあったり結構色んなことがあったんですよ。その中で最後まで軸がぶれなかったのが成功した要因ということで、今振り返ってみると苦しかったこと、大変だったことを忘れてしまい、結果だけが残っています。

村上：一番価値があるのは市民がゼロからスタートしたということ。

登米市の大イベントとしてボランティア2035人が集まった、これは宝なんですよ。このやり方をみんなでマニュアル化し、確立すればいいんですよ。登米モデルとして。

ボランティアによるサポーター、この人達の力を感じました

コーディネーター：ありがとうございました。それぞれ達成感を感じられたイベントだったわけですね。ところでスタッフとしてかかわっていただいた部分での苦労話や反省点などについてはいかがでしょうか。

佐藤（千）：私は、正直事務局の方から手伝ってくれないかといわれ、二つ返事でOKはしたんですけど、その後に大変なことを引き受けてしまったと思いました。

婦人会の場合、いつも物売りへの協力というイメージが強く、若い人達の加入がないのが現状で、ボランティアとしての接し方とか接遇など、面倒なことはできないと思っていたわけです。

婦人会の皆さんが第一線でボランティアするということは、あまりないのですが、最初はとても暑いねとか寒いねとかいいつつも、アートイベントに2ヶ月間も関わることができ、みんなに喜ばれました。

また祝祭友の会でも、はじめは慌てることもありましたが、財団職員の全面的な協力体制に支えられたことで、役員を中心に自分たちの力で音を上げることなく成し遂げたことがとてもよかったと思っています。

佐藤（輝）：私は事務局の方から連絡をいただき、登米市観光協会のボランティアガイドをやっているので、何かお手伝いできるかもと思い引き受けました。

佐藤 輝子

引き受けたもののアートをどのように説明できるかといった不安が大きかったのですが、勉強会が何回かあったので若干身体に入ってきました。

それでも私自身は何ができるんだろうと本当に不安だったんですが、バスの運転手さんやスタッフの方、会場サポーターの方々、周囲のみんなが助けてくれるんですよね。それでなんとかバスのガイド2ヶ月間を終え、終わってみれば、楽しかったなというのが残りました。また3年後に機会があって私が元気であればお手伝いできたらと思います。

及川：事務局の立場での反省点としては、開催決定が遅れたこと、準備期間が短かったこと、予算の少ないところで少々広げすぎたかなということです。

やりたいことをやるというよりは、市民やサポーター、あるいは来訪者などに対し、また地域の方々の役に立とうという発想に立てば良かったという反省もしています。故に次回は、その辺も考慮しながらやらなければいけないと思います。

野家：トリエンナーレという言葉を聞いたときは、別の職場だったので、たいした興味がなかったのですが、まさにその職場（中田生涯学習センター）に配置されてしまいました。

それでも、実行委員会のお手伝いをする程度と思っていたのですが、ところがどっこい8月末からトリエンナーレ一色になりました。びっくりしたのは、予算が少ない。それから動けるスタッフが少ない。経験がない。ないない尽くめの中で26人もの作家、15人のアシスタントが来てその人たちのスケジュール調整。2ヶ月という会期の長さ、7箇所という会場の多さ、その他にプレイベント等々。これは期間中に倒れる人や事故がなければいいなと思いながら始まりました。その

野家 数夫

ような中、大きな成果をあげられたのは、やはり多くのボランティアによるサポーター、この人達の力を感じましたね。

それと事務局の脅威的企画力、それからイベントの組み合わせがすごいと思いましたね。私も今まで何回もイベントに関わってきましたが、トリエンナーレに比べればほんの一部分のところで一大行事と捉えてきた自分がありました。

PRにしてもラジオ・テレビ・雑誌・新聞・広報・冊子・ホームページ、これ以上無いんじゃないかというくらいのPRの幅を見せてもらいました。そして何といっても最後まで事務局長などのリーダーの軸がぶれなかったことです。

佐藤(千):他に、多くの市職員の方々との交流が各会場でできたのが良かった。諏訪公園では正直ロードランナーのところにある三角形の色がなんで違ってるのか、丸いのは何だとか、なんで作ったばかりなのにこんなになってるのかなど、そしたらそれがアートの始まりなんだってことも勉強できました。

また、ボランティアとしての勉強をさせられました(頼まれたという意識ではなくて)。バスで来られた高齢者の方から、「あなたたちはここで何をしてるんですか。」と言われボランティアですって言うと、「だから何をしてるんですか。」って言われてハッと気がつき、「申し訳ありませんでした。ご案内もしませんで。」って謝ったことがありました。

コーディネーター:私たちにも、おもてなしの経験がなかった。その点も今後の課題です。

佐藤(輝):トリエンナーレにてアートに触れさせていただいたおかげで観光協会のガイドの業務に幅と深さができ、感謝しています。楽しかったのは、ツアーガイドのように連れて歩くんじゃなくて、その場所に初めて来た多くのお客さんを自分達で案内する、そういうことを市民でできたのがすごくよかった。

開催地の登米市民が他人事だった…

コーディネーター:今回のイベントに市民の反応が少なかったように感じましたが、この点についてはいかがでしょうか。

佐藤(輝):確かに、市民が他人事だったと思います。

村上:どの会場でも他県ナンバーの車が多く、こんなに面白いことをやってるのに地元の人が少ないのが気に

なりました。

野家:同感です。残念だったのは、市民の関心を引き出せなかったこと。関わりの中で関心を持っていただくようにしたいですね。協働の力って今から進めていくべきことですし、ボランティアに関われる人ももっといると思います。

佐藤(輝):登米市にもよそから来て住んでいる方は、地域で何をしたいかわからないが話がしたいという人が結構いるんです。退職後に移り住む方もいて、そういう人たちは色んな地域で色んなことを見て来て感じていることもあり、色んな感覚が研ぎ澄まされていて情報のアンテナも高いと感じます。このような方たちなど、もっと関わっていただける人々がいると思います。

佐藤(千):例えば何かやるといった時に、じゃあ私が、という人は少ないが、誰かが引っ張るときちんとやっていただける土地柄でもある。私も所属する婦人会や祝祭友の会に協力依頼あったおかげで参加し、皆の思いの丈をアートにかけることができました。アートを知らない世代の私たちにも、こういうものなんだ、とわかっただけでも収穫です。

村上:アートイベントっていうのは別に知識が必要ないと思うんですよ。その作品自体を楽しむ人もいるし、人が集まるというのを楽しむ人もいて、別に作品自体に深い知識がなくても色んな楽しみ方があります。

弘前で2002年に現代美術作家のナラヨシトモという人が企画したナラヒロという作品展があって、完全に市民主体で開催されたんですね。

美術館のない弘前市に六万人も入った。市民活動しているねぷたの青年会の人たちがみんなで弘前を盛り上げ

ようと思っていて、この人たちをいい意味で利用したんですね。アートの原理解を超えたところでいろんな楽しみ方ができるというのが、アートイベントのいいところだと思うのです。

登米市全体にしかけたのは すばらしいと思う

コーディネーター：サポーターとして関わりながら、いろんな作家との交流の中で作品を見てみたいという気づきが生まれ、周られた方もいっぱいましたから、結局、市民の感情をどうやって拡大していくかというところに今回のトリエンナーレがもたらしたものがあると思っていたんですが、そういった部分についてはどう感じましたか。

佐藤（輝）：先ほど、事務局長が市民の視点に立ってやり直したいと言ってましたが、それがピッタリ合っているのかなと思います。

及川：要は幾何学アートなんです。同じ現代アートでもナラさんのは、百人いたら半分の人は取っ付きやすいんです。（市民の関心という点で）。

モンドリアンがどれだけ有名でも、ある程度知識があったほうがいいわけで、例えばネクタイ選ぶときに、幾何学アートの視点で観るといいよって言うじゃないですか。するとその感覚で見るんですよ。そんなところをとってみても、私はレクチャーするべきだと思うんですね。好きに観てくださいだけではちょっと難しいと思うんです。

あとは登米市のミュージアムとして、これからも幾何学アートに特化していくのか、幾何学アートの聖地にしてしまえば、日本にはどこにも無いから観光にはいいかもしれないけど個人的にはどうなのかなと思うんですよね。次のトリエンナーレを考えるに当ってすごく大事なことだと思っています。

佐藤 千賀子

佐藤（千）：それから子どもたちの発表の場も必要だと思います。そうすると、お爺さん・お婆さん・親を含め関心が高まる。スタンプラリーも、どこでもいいから5箇所分のスタンプがあれば応募できるとすれば、もっと関心が高まったのではと思います。

村上：青森の十和田市美術館の例ですが、町全体の盛り上がりの作り方が面白かった。商店街にも作品を置いたんですよ。商店街自体も展示室になったんですね。

町を歩いて、そこかしこに作品があるっていい。子どもが作ったものでもいいんです。それがもし幾何学的な作品を点在されてもいいし、中に現代作家の作品を置いてもいいし、そういう形で街中を歩いてもアートイベントを体感できる仕組みがあった方がいいと思うんです。商店街を全部幾何学にして青・黄・赤に染めてみるとか線を引いてみるとか、そういうような町を巻き込んだ取り組みがあれば、町全体が一色に染まっているというフェスティバル感があるような気がするんですよね。

佐藤（輝）：市民がどう関って楽しめるかというふうに持っていくとなおいいですよね。やってみようかとか、参加してみようか、観に行こうかってなれるといい。

村上：そういうのを実感できる仕掛けが必要かもしれないですよね。

佐藤（千）：現在各地でお祭りしてる、でも地域ごとなのです。私はこのアートイベントを登米市全体にしかけたという意味ですばらしいと思います。

及川：市民がネットワークを組んで市民の力をもって行政を動かすくらいになりたいです。

佐藤（千）：それが本当の協働だと思うの。

村上：アートイベントって突き詰めるほどいらなくなるもの。要は、文化というのはもしかすると余裕のあるときのものになってしまうから。

実はそうではなくて、ここまでの成功体験がありました。

なんで成功したのかそれをみんなで確認して共有することから始めるのが大切ですね。その上で問題点を考える。

この2035人を核とし、さらに続けていくことが大切だと思います。

佐藤（千）：歴史を重ねることが大事ですよね。

アートを身近に感じてもらうために…

永浦 敬悦

コーディネーター：終わりに、ミュージアム運営の今後についてご感想をお願いしたいと思いますが、実は、旧南方町において1992年に国際アートフェスティバルが開催されことに対し、賛否両論があったようでした。

村上：南方ってそうなんですよね。そういうことがあるらしいんですよ。

コーディネーター：それが根底にあるのですね。

野家：今の話で気づいたんですけど、アートイベントに消極的な意見の人のことを無視できないのです。今回のトリエンナーレに対しても同様です。予算をかけてなんなのって。その人たちが3年後にはブレーキをかけますから。そこなんだと思います。成功の裏と表。

佐藤（輝）：私も、何度か言われてました。ボランティアの活動回数のスタンプに見合った、グッズをいただきましたが、それに対してすごい批判があったんですよ。

村上：最近は、文化イベントとか文化施設が全国的にも縮小傾向にあるんですよ。登米市に限ったことではなくて、全国的に厳しい風というのはあると思います。

そんな中登米市の場合、トリエンナーレにしてはかなり少ない予算でしたよね。

だだ、アートイベントで難しいのは、じゃあこれをやったから経済効果がいくらありましたとか、これをやったからこうとか言い難いんですよね。

予算規模が少なくても地道に長くやっていくというのも、ひとつのやり方だと思うんですよね。

あとは、ネットワークですよね。青森県美術館に行った時に、そこにトリエンナーレのポスターが貼ってあって、印象的だったので、各地の同じような趣向の人にアピールするのに、手段としてネットワークを築いていく。そうするとサトルミュージアムの存在意義というのが高まってくると思うんですね。そして、それは日々発信することです。

佐藤（輝）：ちょっとお会いした時に、言葉にする、それが必要なんじゃないかなと思います。先日、40人くらいのお客様がありました。アートの話をしながら案内すると、トリエンナーレをしたんですかって外国の方にも興味を持ってもらいました。

及川：是非、出かけた時に、色んな美術館に観に行っていただきたいと思います。

そうすると少しずつわかるようになってくるじゃないですか。

佐藤（千）：市外に出た時に、登米市ってこういうんだよって、伝えることだね。

野家：職員も宣伝マンにならないと。

佐藤（輝）：私は、出かけるとき、登米市の資料は全部持っていってます。

野家：そういうことを市民の方にもやっていただく、それも協働のひとつですよね。

村上：そういうアウトプットというのが、市民レベルであるというのは全然違いますよね。

生涯学習センターが核になって、ここにくればなにか面白い情報が手に入る、面白い人がいる、というところの環境をここで作ってあげるというのが大事なのかなと思いますね。

野家：色んな美術館を観るということは私たちでもできるんですよ。今後色んな形でコースに入れたいですね。

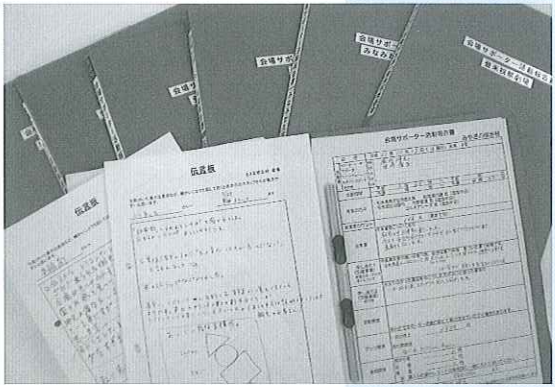
村上：サトルサトウアートミュージアムは、幾何学構成アートの拠点。全国にも競争がないからその分有利と言えるが、それだけでよいかという部分もある。

今後は、他館とのネットワークも必要（貸し借り含めて）。ここにくると面白いことがある。ここを活用する市民がいる。市民がアートに触れて成長する場を目指してほしい。また、アーティストが滞在できるプログラムもほしい。

コーディネーター：様々なご意見を是非今後に活かし、3年後のトリエンナーレにつながることを希い、本日の座談会を終わりにいたします。本日はありがとうございました。

サポーター日誌から（抜粋）

毎日報告されるサポーター活動報告書。報告書に書ききれないときは、別紙にびっしりと書かれてくることもあり、サポーターの皆さんの熱い思いが詰まった報告書は登米アートトリエンナーレを成功へと導くカギとなりました。サポーター日誌の中から生まれた会場案内マップや案内掲示板などもありました。



▶9月1日（水）／登米歴史博物館

高山登氏の作品が出来上がり、公園にもマッチし素晴らしく思います。新聞社・テレビ局など取材が訪れました。

▶9月1日（水）／登米祝祭劇場

スタッフは最低2人は必要。午前中は一人のためテントと作家の間を走り回った。2人になったとたん、若干余裕もありました。初日ということもありとまどいもありましたが、なんとか終了。一日体験したので明日以降はもっとスムーズに進めるようにしたいと思います。

▶9月2日（木）／みやぎの明治村

ミュージアムグッズのそばに貼れる値段（値札）のようなものがあるとよい。あと、会場の場所と作家さんがわかる会場案内プリントがあるとよいと思う。

▶9月4日（土）／みやぎの明治村

大変暑い一日でした。インフォメーションの全影及びミュージアムグッズショップの並べ方など、写真撮影して次のサポーターが分かるようにした方がよいのでは。

事務局対応

毎日交代するサポーターさん達がわかりやすいように、ミュージアムグッズ配置写真とラベルを作成。会場準備マニュアルを作成配置しました。

▶9月4日（土）／みなみかた花菖蒲の郷

石巻市からのお客様からすばらしいお祭りなのでPRをもっと工夫してはどうか、と言われた。「内容がよいのにもったいないですね。」

▶9月5日（日）／諏訪公園

小学校3年と6年の児童がプールの帰りに寄ってくれました。彼らは作品をみるなり、「この向こうに絵が見えるんだよ」と話していました。ミニバスケット大会もあり他の子供達も来て真剣に説明を聞いていきました。シャトルバスが時間前に出発したために乗れない人がいました。

▶9月12日（日）／石森地区

石森地区は現在5ヶ所あるので、持ち歩ける地図があると来場者も案内する側も良いと思いました。

事務局対応

石森地区は、石ノ森章太郎記念館をスタートして地区内の空き店舗と公園に設置された作品を散策しながら楽しめるコースでしたが、インフォメーションと離れているため対策が必要でした。サポーターさんの提案を受けて会場内マップを作成したところ、歩きながら作品を鑑賞する方々が増えました。他会場も同様に対応しました。

▶9月2日（木）／登米歴史博物館

雨にもかかわらず、遠路よりきていただきありがたかった。HPを見てきてくれた人もいた。見学後にギャラリートークに参加するという方も何人かいました。

▶9月23日(木)／登米祝祭劇場

映画会に子供達が大勢くるが雨のためテントには誰も近づかない。館内から池中のトリエンナーレ作品を見てる子がいた。サポーターが2人いたので助かった。一人だと孤独と低温でテンションが下がるかも。今日は雨のせいか周回バスが唯一の来客者といった感じで、無人島で船を待つ漂流者の気分でした。

事務局対応

登米祝祭劇場は作品が多く充実した会場でしたが、テントが離れている・スタンプラリー会場ではないことから改善を要しました。施設管理者にお願いし10月からテントを移動し対応しました。この結果たくさんの来館者に案内ができるようになりました。

▶10月2日(土)／みやぎの明治村

遠山之里には多くの来場者があったが、トリエンナーレ鑑賞者はそれほど多くないという印象を受けた。しかし遠方からわざわざトリエンナーレ作品を見に来た方もいて、広くPRされていると感じた。

▶10月17日(日)／登米祝祭劇場

JAのイベントもあり来場者が多かった。周回バス利用、他に仙台方面からアクセスマップを持って持参する方が数名いた。スタンプラリー会場でないが、スタンプをお願いされ、押印できないことを説明した。

▶10月20日(土)／みやぎの明治村

本日も団体客が多く、その中に1回アートを見に来て1日で全部見られなかったそうです。まだ今月末までやっておりますと案内したら、また来てみますと声を掛けてくださいました。

▶10月24日(日)／みなみかた花菖蒲の郷

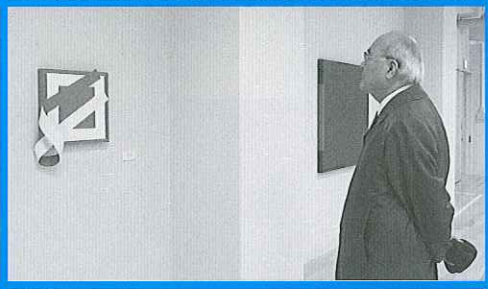
トリエンナーレ作品だけでなく、公園内の作品について説明すると、ほとんどの来場者の方々が時間の許す限り見学していました。今後も他の作品について引き続き説明をしたほうがよいと思います。
お客様からスタンプラリーの順番で南方の次が登米なので西端から東端への順番になっているので戻るようになるのはおかしいという意見がありました。

▶10月30日(日)／みなみかた花菖蒲の郷

トリエンナーレクライマックスバスツアーにより来場。そのほかに思ったより、個人で見学に来る人が多かった。来場者とのコミュニケーションが楽しかった。

tome international art triennal

Memory of Art 2010



作家略歴 ARTISTS BIOGRAPHIES

1.作家の記載順序については、アルファベット順に記載した。
2.生年以降、主な作品・展覧会・沿革・活動等の履歴については、年代順に記載した。
3.年代が複数年にわたるものについては、/でつないだ。

招待作家

コルメナレーズ Asdrubal Colmenarez

ヴェネズエラ国籍／造形作家

1936年 トリヨ、ヴェネズエラ生まれ
1968年 パリに移住
1969年 フランス政府給費留学生
1970年 ヴェネズエラ文化庁奨学生
1972年 パリ ビエンナーレ招待
1973/2001年 パリ国立第八大学、造型アート学科、準教授
1978年 グッケンハイム財団より招待留学(米国)
1984年 ビエンナーレ 2A リンコナダ美術館、カラカス、ヴェネズエラ
1985年 ラテンアメリカ・ビエンナーレ、ハバナ、キューバ
1988年 ソウルオリンピック現代彫刻展、ソウル(韓国)国際アート・フェアー、チュリッヒ、マドリッド、パリ、マイアミ等で発表。

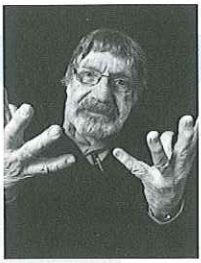
個展▶カラカス美術館、パリ市近代美術館、ナショナル・アート・ギャラリー(カラカス)、レアテウ美術館(アルル)、アンテイック美術館(メデイリン)コロンビア、ジュス・ソト美術館(ヴェネズエラ)等で回顧展、日本に縁があり、名古屋、東京のギャラリーで発表、南方アートフェステバルの際は現地制作、日本に2ヶ月間滞在。

カルロス・クルズディエズ Carlos Cruz-Diez

ヴェネズエラ国籍／視覚芸術作家

1923年 カラカス、ヴェネズエラ生まれ
1955/56年 バルセロナとパリに滞在
1957年 カラカスに帰国、視覚芸術研究所を設立
1958/60年 カラカス美術学校副学長兼絵画科教授
1960年 パリに住む
1972/80年 パリ国立高等美術学校・講師兼卒業試験審査委員
1997年 クルズ・ディエズ版画美術館長就任(カラカス、ヴェネズエラ)
1966年 第3回 カルドバ・アート・アメリカン・ビエンナーレ大賞受賞(アルゼンチン)
1967年 第9回 サンパウロ・ビエンナーレ、国際絵画賞受賞、ブラジル
1971年 造型芸術・国内賞受賞、ヴェネズエラ
1976年 第6回 建築ビエンナーレ、建築の介入賞受賞、ヴェネズエラ
2002年 レジョン・ドヌール勲章授章、フランス

視覚芸術の第一人者として、パリのギャラリー・デニズ・ルネを中心に世界各地で発表、平面、レリーフ、オブジェの作品以外に、公共作品(野外立体造型作品)も多くの国々に設置されている。昨年、ヒューストン(米国)に大規模な美術館が完成。



江口 週 Syu Eguchi

彫刻家／造形作家

1932年 京都府生まれ
1956年 東京芸術大学卒

受賞暦▶
1965年 第一回現代日本彫刻展大賞(宇部市野外彫刻館)
1971年 第四回現代日本彫刻展毎日新聞社賞
1997年 平成8年度芸術選奨文化大臣賞
2000年 紫綬褒章、他多数受賞

コレクション▶
東京国立近代美術館、東京都現代現代美術館、東京都、東京国際フォーラム、北海道立旭川美術館、旭川市彫刻美術館、新潟市美術館、いわき市立美術館、群馬県立美術館、千葉市立美術館、神奈川県立美術館、京都国際会議場、伊丹市立美術館、三重県立美術館、和歌山県立近代美術館、井原市立田中美術館、広島市現代美術館、島根県立美術館、高松市立美術館、ニューヨーク近代美術館、ミデルハイム美術館、他多数

市野 泰通 Hiromichi Ichino

造形作家

1951年 京都府生まれ
1975年 東京芸術大学デザイン専攻卒業
1980年 文化庁芸術家国内研修員

受賞暦▶
1981年 ギャラリーオカベ(東京)
1988年 Gallery Point a la Ligne(パリ)
1994年 モリスギャラリー(東京)
1997年 ギャラリー 375(東京)
1999年 Gong Ling Gallery(東京)
2006年 T&S Gallery(東京)

グループ展▶
1974年 日本版画協会展、東京都美術館(東京)
1980年 第1回国際ミニチュア版画展、
Space Proup of Korea(ソウル)
1987年 20人の日本作家展「SYN ART」、
アトリエ 4(パリ)
1988年 サロン・ド・コンパレゾン、Gland Palace(パリ)
-ing THEATER、スペース1-11-1(東京)以後関連展8回
1992年 疾走する空間、タニシマ・ギャラリー、東京
1995年 ジャパン・フェスティヴァル
"日本現代作家7人展"キリル&トディ美術館、
ソフィア 空間・形成と余白、
ギャラリートーニチ新宿(東京)
1996年 神奈川アート・アニュアル、
神奈川県民ホールギャラリー(横浜)
2000年 サロン・ド・グランエジュンヌ・ドゥジュドゥィ展
2000年 Espace Eiffel-Branly(パリ)
2001年 上海人民公園国際交流展2001、
上海人民公園(上海)
2006年 日仏現代絵画実展、トヨタネッツ仙台(仙台)
2008年 構成と余白、
Combes Gallery/American University of Paris(パリ)
2009/ リアリテイ・ヌーベル2009、
2010年 Parc Floral de Paris(パリ)

小林 はくどう Hakudou Kobayashi

映像作家

1944年 仙台生まれ。映像作家、美術家
多摩美術大学美術学部絵画科卒業
1968年 「はくどうマシーン」を発表
1970年 大阪万博の三井館に展示
1971年 E.A.T.のメンバーとして中谷芙二子や森岡侑士とともに
ストックホルム、ニューヨーク、アーメダバード、
東京の4都市をテレックスで結び、市民が自由に問答する
「ユートピアQ&A; 1981」を実施
1972年 カナダのヴィデオ作家マイケル・ゴールドバーグが来日。
ヴィデオによる芸術活動を目的として結成された
〈ビデオひろば〉を結成する。
「ビデオ・コミュニケーション/DO IT YOURSELF kit」を
銀座のソニービルで開催
1973年 「東京ビエンナーレ」(東京都美術館)
1974年 「トーキョー・ニューヨーク・
ビデオ・エキスプレス」展(天井桟敷)
1975/ 「ジャパン・アート・フェスティバル」展
76年 (全米各地を巡回)
1977年 「現代美術の鳥瞰図」展(東京国立近代美術館)に参加
1978/ 国立市でコミュニティビデオ
93年 〈ビデオひろば〉の活動を行なう。
1979年 「日米ビデオアート展」(ニューヨーク近代美術館)
1982年 「シドニービエンナーレ」
1988年 「ボン・ビエンナーレ」出品(ドイツ・ボン)
1981年 「今日の日本美術展」(宮城県立美術館)
1990年 「はくどうのビデオジャングル」映像個展
(大阪キリンプラザ)
1996/ 「戦後日本の前衛美術展」
97年 (横浜美術館、グッゲンハイム・ソフォー美術館、
カルフォルニア州立美術館)
2005年 アート&テクノロジーの過去と未来展」(東京ICC)
2007年 「ラディカルコミュニケーション」
(アメリカ・ボールゲッティインスティツユート)
2009/ 「Vital SIGNALS」
10年 全米・日本国内で巡回中
2009年 「愛知トリエンナーレ」でワークショップ

NPO市民がつくるTVF (東京ビデオフェスティバル)代表理事。
東京ビデオフェスティバル、愛媛ビデオフェスティバル、
豊田ビデオコンクール等審査員歴任。
元成安造形大学教授。
著書に「TV番組をつくろう」(リブリオ出版、1984)、
『市民ビデオ宣言』(玄光社、1998)など。

窪田 俊三 Syunzo Kubota

造形作家

1945年 神奈川県川崎市生まれ
1970年 多摩美術大学院修了
第9回毎日現代美術展(東京都美術館)
1981年 第15回毎日現代美術展(東京・京都)
1984年 神奈川県展〈対の吊布〉入賞
(神奈川県民ギャラリー)
1986年 神奈川県展〈ブッキラボー〉入賞
(神奈川県民ギャラリー)
1987年 個展 小林画廊(東京銀座)
川崎市民ミュージアムへの道彫刻展 市民賞
第17回日本国際美術展(東京・京都)
1989年 第7回ヘンリームーア大賞展〈ストント〉
優秀賞(美ヶ原高原美術館)

松宮 喜代勝 Kiyokatsu Matsumiya

造形作家

1951年 福井県生まれ
1975年 大阪芸術大学(津高和一ゼミ)卒業
1981年 第1回平行芸術展出品(東京)
1983年 第2回プサンビエンナーレ出品(韓国)
1984年 第15回日本国際美術展出品(東京)
以降 '86、88、90
1985年 第3回吉原治良賞美術コンクール出品
優秀賞受賞(大阪)
1988年 和紙と現代美術展出品(イタリア)
1990年 大飯町きのこの森公園
総合プロデューサーに就任(94年完成)
日本の作家3人展出品(ベルギー)
1992年 朝日町古墳公園内に
野外レリーフ(42m)を制作(福井)
1994年 奥阿賀ふるさと館壁面に1200㎡の
レリーフ設備(新潟)
1998年 個展
(クラコフ日本美術技術センター;ポーランド)
2000年 個展(西宮市大谷記念美術館;兵庫)、
大地の芸術祭−越後妻有アートトリエンナーレ2000−
出品(新潟川西町)
2001年 個展(MAISON DU CHEVALIER;フランス)
2003年 個展(Westwood Gallery;ニューヨーク)、
Aspect of Asia展出品(ドイツ)、
大地の芸術祭−越後妻有アートトリエンナーレ−にて
アートパフォーマンス(新潟十日町市)
2005年 愛・地球博に
地球と握手『大地の呼吸』出品(愛知)
2006年 愛・地球博1周年記念イベントに
地球と握手『愛・地球博での出会い』
制作展示(愛知)
2009年 大地の芸術祭に地球と握手in妻有2009出品と
ワークショップ(新潟)(6,000人)、
水と土の芸術祭に地球と握手inとやの潟の呼吸出品(新潟)
2010年 地球と握手in上海万博
日本館での出会い(上海万博日本館)

ピエール・マヴロプロス Pierre Mavropoulos

フランス国籍／造形作家

1961年 パリ生まれ

個展▶
1994年 パリ市14区企画・ポルト・ウヴェール
1996年 ギャラリー・カリアギン、パリ
1996年 ル・パブロ、パリ
1998年 アーテイスト・アトリエ、パリ
2004年 ル・パブロ、パリ
2008年 ル・パブロ、パリ

グループ展▶
1992年 造型芸術の20年展、ベルビル文化センター、
パリ、フランス
1992・93年 選抜・日仏現代絵画展
(日本テレビ放送／コンパレゾン企画)、日本
2006年 日仏現代絵画実展、仙台ネッツトヨタ、
2007年 Satoru Sato Art Museum 開館展、
登米、日本
2009年 現代幾何学抽象絵画展、
地球堂ギャラリー、東京
2009年 現代幾何学抽象絵画展、
企画モテキ画廊、富岡
2010年 ギャラリー・オーロラ、パリ

サロン▶
1986/04年 Grands et jeunes d'aujourd'hui(パリ)
1989/08年 レアリテー・ヌーヴェル(パリ)
1990/94年 コンパレゾン(パリ)
2000/08年 レアリテー・ヌーヴェル・審査委員
2010年 作品「Métaphore de la ligne(線のメタフォー)」

守屋 行彬 Korin Moriya

造形作家

1945年 長野県塩尻市生まれ
1970年 多摩美術大学院斎藤研究室を大学紛争のため中退
1971年 第10回毎日現代日本美術展に出品(東京都美術館)
1972・78年 アーティストブック"Catastrophe and Structure"
自費出版、全10巻を発表
1974・75年 第9.10回
ジャパン・アート・フェスティバル出品
1979年 チハコーバ・プラスタ企画
「写真における風景、肖像、静物」展(プラハ国立美術館)
1985年 第14回個展"Mid-air Painting"
(六本木、ストライプハウス美術館)
日豪文化交流現代日本美術展出品
(メルボルン・現代美術センター)
1986年 原美術館企画「現代日本美術展」出品(台湾、台北国立美術館)
1987年 ソウル・横浜現代美術展出品(韓国、ソウル)
丹沢野外彫刻展出品"Rainbow Screen"
(神奈川県秦野市)
1988年 第11回神戸須磨離宮公園
現代彫刻展出品"Pal-Pal"(神戸市)
1989年 第3回東京野外現代彫刻展
"時の流れ"入賞(世田谷区、東京都立砧公園)、
ACT20とうかい鉄による都市彫刻展
"Prelude"入賞(愛知県東海市)
1990年 小田原城野外彫刻展"AMANOGAWA"
入賞(神奈川県小田原市)
1993年 第15回現代日本彫刻展出品
"Do-Can"(山口県宇部市)
1997年 倉敷まちかど彫刻展"樹輪"入賞(岡山県倉敷市)
2002年 ユーモア陶彫展にて"押し競饅頭"
入賞(岐阜県土岐市)
2003年 ワークショップ"野原で大きな絵を描こう"横須賀市美術館建設
2006年 地観音崎走水園地越後妻有「第3回大地の芸術祭」出品
"ピュアーランドの夏祭り"(新潟県十日町市)

中川 猛 Takeshi Nakagawa

造形作家

1950年 兵庫県加古川市生まれ
1974年 東京芸術大学美術学部卒業
1976年 同大学院修士課程修了
1978年 同大学院研究生修了

個展▶
1979年 スルガ台画廊(東京)
1984年 田村画廊(東京)
1985年 ギャラリー射手座(京都)
1990年 Gallery Point a la Ligne(パリ)、
ときわ画廊(東京)
1991年 加古川総合文化センター(兵庫)
1993年 かわさきIBM市民文化ギャラリー(川崎)
2001年 松風ギャラリー(兵庫)
2006年 T&Sギャラリー(東京)

グループ展▶
1986年 Time & Space ATELIER 4(パリ)
1987年 第6回浜松野外美術展
浜松中田島海岸(静岡)
1988年 多摩川ふっさ野外美術展88(東京)
1990年 サロン・デ・コンパレゾン
グランパレ(パリ)
1992年 神奈川アートアニュアル92
神奈川県民ホール(神奈川)
1995年 現代日本作家7人展
「ジャパンフェスティバル」(ソフィア)
1998年 さまざまな眼91
かわさきIBM市民文化ギャラリー(川崎)
2000年 サロン・ド・グランエジェンヌ・デュ・ジェデュイ展(パリ)
2005年 プロフィール1 カスヤの森現代美術館(神奈川)
2008年 構成と余白
Cmbes Gallery American University of Paris(パリ)
2009年 リアリテヌーヴェル2009 Prc Floral de Paris(パリ)

朴 贊甲 PARK Chan-Kab

韓国籍／造形作家

1940年 韓国・山清生まれ
1965/ 国内外での個展 43回(韓国、米国、フランス、
2010年 デンマーク、アルゼンチン、ペルー、日本、他)
1965/ グループ展と招待展380数回
2010年
1991/ 国際現代彫刻シンポジューム招待40数回
2010年
1996年 EU文化首都指定記念コペンハーゲン特別展
(デンマーク外務部招待)
1996/ 国際彫刻シンポジューム大賞受賞
2001年 (ペルー、フランス、スエーデン、アルゼンチン、他)
1997年 ナント市 東洋彫刻公員開館記念造型作品
現地制作設置(フランス)
1997/ 公共モニュメント(国際野外彫刻シンポジュウム)
2010年 企画実行委員長 歴任(釜山UN記念公園、
韓国民俗村、金泉、山清、他多数)
2000年 Artiste Choice 大賞
Lulea Winter ビエンナーレ、スエーデン
2000/ パリ・ナショナルデポザール特別招待展／
2003年 カルセル・デウ・ルーブル美術館(フランス)
2003年 銅賞受賞・パリ・ナショナルデポザール、
フランス
2004/ マニュ国際アート・フェステヴァル審査委員、
2005年 フランス
2005年 一等文化勲章 受賞
(トウルジヨ・ヴェネズエラ Venezuela Trujillo)

現在 韓国美術協会協自問委員、国際彫刻家 親善協会長、フランス・ナショナルデポザール・正会員、国際現代美術館 館長(韓国)

齋藤 史門 Shimon Saito

造形作家

1953年 東京生まれ
1980年 毎日国際美術展(東京都美術館)
1982年 毎日国際美術展 佳作賞
1983年 現代日本彫刻展
東京国立近代美術館賞(宇部市)
1984年 毎日国際美術展 佳作賞
1985年 相模原野外彫刻展
日本金属造形作家展(銀座和光)
1986年 東京都野外彫刻展(世田谷砧公園)
日本金属造形作家展
1987年 立川昭和記念公園野外彫刻展(立川市)
神奈川県アートアニュアル(横浜市)
1989年 鉄による都市彫刻大賞展
野外彫刻賞(東海市)
1990年 第10回ハラ・アニュアル(原美術館)
東京オブジェ・コンペティション(東京都庁)
1991年 小田原野外彫刻展(小田原市)
藤野町野外彫刻展(藤野町)
1992年 足立区国際彫刻展(東京、足立区)
1993年 横浜彫刻展 大賞受賞(横浜)
1994年 市政40年記念
美濃加茂彫刻シンポジウム 大賞受賞
2005年 長野市野外彫刻賞受賞

高山 登 Noboru Takayama　造形作家

1944年 東京生まれ
1968年 東京芸術大学美術学部油画科
(山口薫教室)卒業
1970年 東京芸術大学大学院美術研究科絵画専攻
(野見山暁治研究室)修了
1981年 宮城教育大学教育学部美術科助教授
2000年 インターナショナルスタジイオアーテイスト/
P.S.1.Museum N.Y (アメリカ)
2001年 宮城教育大学教育学部美術科教授
2006年 東京芸術大学美術学部先端芸術表現科教授

展覧会▶
1969年 個展『地下動物園』椿近代画廊(東京)
1970年 現代美術の動向展(京都国立近代美術館)
1971年 第11回現代美術展(東京都美術館)
1973年 第8回パリ国際青年ビエンナーレ
(パリ国立近代美術館)
1976年 シドニービエンナーレ
(ニューサウスウォールギャラリー、オ-ストラリア)
1991年 インターナショナルスタジオプログラム
P.S.1Museum N.Y (アメリカ)、ASIANA:
Contemporary Art from Far East
ヴェニスビエンナーレ (イタリア)
1996年 12のインスタレーション(東京都現代美術館)
日本1970;物質と知覚
サンテイテエンヌ美術館(フランス)
1997年 Hybrid&Wood 光州ビエンナーレ(韓国)
2000年 Mann&Space 光州ビエンナーレ(韓国)
2001・03年 みちのくアートフェステイバル2001
(国営みちのく杜の湖畔公園 宮城県)
2003年 アート宮城2003(宮城県美術館)
2005年 もの派ー再考 国立国際美術館(大阪)
写真で見るSPACE TOTUKA '70展 スペース23℃(東京)
2010年 ー300本の枕木 呼吸する空間ー(宮城県美術館)

推 薦 作 家

ファビアナ・クルズ Fabiana Cruz　映像作家

パリ在住の若手映像作家。招待作家であるクルズ・ディエズ氏の孫。

畠山 敏 Satoshi Hatakeyama　グラフィックデザイナー

1992年、世界のコーポレートイメージデザイン年鑑に2点入賞。
2002年、東北デザイングランプリ2002・グランプリ受賞。
黄金比に魅せられ、黄金比をモチーフにした作品を数多く制作。

北川 順一郎 Junichiro Kitagawa　造形作家

1975年渡仏。18区のラマルクに居を構えてパリの画壇に作品を発表。
帰国後、銀座にギャラリーモテキを開設。
東京を中心に制作、発表し、パリでの招待展にも参加。

越野 成朗 Shigeaki Koshino　造形作家

1980年渡仏。コンパレゾン、レアリティ、ヌーベエル、
グラン・エ・ジュンヌ・ドオジュドウイ、招待展に出品。パリにて個展開催。
帰国(1985年)ギャラリーK、栃木県立美術館、ギャラリー青城等。

三浦 寛也 Hiroya Miura　音楽家

学生時代をカナダのモントリオールで過ごし、現在アメリカを中心として
音楽活動を行っている。雅楽、即興音楽、マルチメディアなど、発表の場と
媒体にとらわれない自由な音楽活動を展開している。

内藤 松子 Matsuko Naito　造形作家

東京芸大卒。1990年にパリの招待展コンパレゾンに出品。
村松画廊、他、個展を中心に作品を発表。

沼田 直英 Cyukuei Numata　造形作家

1979年から、東京を中心に個展・グループ展を野外作品展も含め開催。
1987年の犀川国際アートフェスティバル信州新町美術館他(長野)以降
野外作品展等発表。

ウォーミィ・パック Woomi Park　造形作家

パリ在住の若手造形作家。招待作家、朴(パック)氏の娘。

関本 欣哉 Kinya Sekimoto　造形作家

東京、仙台で活動中の若手現代アート作家。
2009年、サトル・サトウ・アート・ミュージアム主催の
ワークショップに参加。TOURNAROUND(ターンアラウンド)代表。

妹尾 直 Naoki Seno　造形作家

東京を中心に活動中の若手造形作家。
2009年、サトル・サトウ・アート・ミュージアム主催の
ワークショップに参加。バルセロナ美術学校留学。

イネス・シルバ Ines Silva　造形作家

カラカス、ベネズエラ在住。MADIのグループで活躍。

インディア・セレナ・ザパタ・マリン India Serena Zapata Marin　造形作家

ベネズエラ国籍。パリ在住の若手造形作家。

▶アドバイザー
佐藤 達
Satoru Sato
1945年登米市生まれ。

東洋美術学校卒、同校助手を経てパリ国立高等美術学校に留学。エジプトでピラミットに出会い、構成・構造・幾何学の原点に接し衝撃を受ける。国立パリ大学第八、造型美術学科講師を16年勤める。パリ招待サロン、レアリテー・ヌーベル運営審査委員就任。これまで個展75回、グループ展390回、環境造型作品制作設置は40点を数え、世界30ヶ国で発表。エクワドル政府より第一等文化功労賞。韓国・山清市の国際彫刻シンポジュームで大賞を受賞。釜山広域市南区の名誉区民賞を受賞。登米市立 Satoru Sato Art Museum 開館。

実行委員会・部会・事務局の様子❶

▲2010.6.4プレスリリース

予算、準備期間、スタッフのいずれも少なく厳しい状況のもと、たくさんの方々の温かいご協力とご支援によって実現できた登米アートトリエンナーレ。

会期前に行われた実行委員会・部会・各関係団体との調整では、実現不可能に思われることも多く、頭を抱えることの連続でしたが、その度にアイディアと協力体制で新たな道が切り開かれていきました。

▲実行委員会の様子

▲2010.5.27部会の様子

▲イベント出演者と打合せ

▲若生副知事から激励をいただきました

会期前は広報活動・プレイベントと同時進行で会議が行われました。特に部会は、会期前まで週1回のペースで開催、毎回激論が交わされました。

会議の他、部会ごとの打合会や関係団体との調整など沢山の連絡調整会議が行われ、官民協働の事業実現のための準備が日々展開されました。それはまさに創造的で、顔を合わせたことのない人々がひとつになっていく奇跡の連続でした。

▲アドバイザーと打合せ

実行委員会と部会開催

❶	H22.5.10	第1回実行委員会
❷	H22.5.27	第1回実行委員会部会
❸	H22.6.3	第2回実行委員会部会
❹	H22.6.10	第3回実行委員会部会
❺	H22.6.17	第4回実行委員会部会
❻	H22.6.24	第5回実行委員会部会
❼	H22.6.24	第2回実行委員会
❽	H22.7.1	第6実行委員会部会
❾	H22.7.8	第7回実行委員会部会
❿	H22.7.15	第8回実行委員会部会
⓫	H22.7.29	第9回実行委員会部会
⓬	H22.8.12	第10回実行委員会部会
⓭	H22.8.19	第11回実行委員会部会
⓮	H22.8.24	第3回実行委員会
⓯	H22.11.17	第4回実行委員会

実行委員会・部会・事務局の様子❷

▲朝礼は日々進行状況が変わる制作展示会場対応の要、ここから全会場の一日がはじまります。

会期初日から、事務局は一変し連日サポーターや他部所職員の出入りで、にぎやかになりました。
作家・制作アシスタントの制作現場対応と連絡・見学者案内など全てがはじめてのことばかりでしたが、手探りながらも様々な対応に奔走。市民ボランティア・市職員との垣根ない組織のもと、事業成功のための真剣な話合いと対応が日夜行われ、その団結力と機動力は日々成長し続けました。

▲佐藤氏も作品制作・設置について奔走

▲会場間の連絡調整・メディアの対応etc。初日は電話もなりやみませんでした。

▲毎朝行われた会場サポーターリーダーミーティング

▲酷暑の制作期間は「命の水」とよばれました

会期中にも広報活動のひとつとして展示会場（諏訪公園）周辺で開催された登米市駅伝大会に出場しトリエンナーレを宣伝しました。

トルチェチーム8位入賞、ラパンチーム10位と健闘。

トルチェ＝フランス語で「かめ」
ラパン＝フランス語で「うさぎ」

STAFF

登米アートトリエンナーレ実行委員会

委員長　佐藤 幸一(サトルサトウアートミュージアム友の会)
副委員長　阿部 泰彦(㈳登米市観光物産協会)
監　事　菅原 幸盛(みやぎ北上商工会)
監　事　伊藤 俊郎(登米市国際交流協会)
委　員　鹿野 勝悦(JAみやぎ登米農業協同組合)
委　員　野村 博(㈱とよま振興公社)
委　員　西條 孝一(協同組合もくもくランド)
委　員　髙橋 貞志(㈱みなみかた町振興公社)
委　員　小野寺 和彦(㈱みやぎ東和開発公社)
委　員　工藤 貞夫(㈱いしこし)

登米アートトリエンナーレ実行委員会部会

総務・企画部会長　実行委員会事務局長
イベント部会長　新田 修平(サトルサトウアートミュージアム友の会)
交通・環境整備部会長　三浦 信一(㈳登米市観光物産協会)
交通・環境整備部　菊地 裕樹(㈳登米市観光物産協会)
広報部会長　齋藤 恵一(コミュニティFM)
作家サポート部会長　佐々木 信一(登米市国際交流協会)
作家サポート部　須藤 英一(登米市国際交流協会)
制作アシスタント部会長　小泉 太一(サトルサトウアートミュージアム友の会)
おもてなし部会長　永浦 敬悦(登米市教育委員会)

アドバイザー

造型作家　佐藤 達

登米アートトリエンナーレ実行委員会事務局

事務局長　及川 幾雄
事務局　伊藤 多恵子、千葉 智恵、中嶋 美芳

行政担当者【登米市教育委員会中田教育事務所】

野家数夫、及川 昭彦、佐藤 静樹、浅野 孝子、石川 悟、伊藤 徳一郎、佐藤政幸、久須田 正喜、進藤 由里、阿部 奨、千葉 幸也、佐藤 修子

サポーター／団体

サトル・サトウ・アートミュージアム友の会、とめっこ隊、
㈳登米市観光物産協会おもてなし推進員、
㈳登米市社会福祉協議会ボランティア友の会、
JAみやぎ登米女性部、佐沼婦人会、北方婦人会、新田婦人会、
森婦人会、中田婦人会、登米婦人会、登米町水墨画グループ、
登米祝祭劇場友の会、登米市歴史博物館友の会、
登米市国際交流協会、登米ブロック商工会青年部連絡協議会、
皖山会、とめ・くりはらマンドリンクラブ、舞踊熊谷流、
日本フラワーデザイナー協会講師

サポーター／個人

阿部 あつ子、飯川 浩子、鵜沼 信子、遠藤 由美、及川 妙子、及川 春菜、及川 由佳、太田 久美子、亀井 祐子、佐久田 優子、佐々木 和枝、佐々木 宏美、佐々木 めぐみ、佐竹 寿美子、佐藤 貴子、佐藤 ひろみ、佐藤 みき子、佐藤 正孝、佐藤 桜桃、白鳥 まき子、菅原 幸子、鈴木 恵美、田崎 智子、千葉 恵莉花、千葉 広大、千葉 大輔、千葉 大洋、千葉 徳郎、早坂 重禎、星 久美子、堀内 瑞、真山 優太、三浦 恵津子

サポーター／行政

登米市教育委員会、南方子育てサポートセンター

サポーター／制作アシスタント

荒木 悟(宮城県)、有馬 寛子(東京都)、京増 晃和子(宮城県)、
菅野 晴香(宮城県)、広野 仁(宮城県)、河野 萌望(京都府)、
庄子 裕輔(宮城県)、高橋 美菜希(新潟県)、知久 眞也(千葉県)、
福島 利枝子(東京都)、宮川 沙織(千葉県)、森 かずよ(沖縄県)、
山田 黄菜(神奈川県)、山田 梨代(東京都)

通訳

岡本 一男、高野 志津

翻訳

佐々木 清公、亀卦川 浩江

ホームページ

株式会社　COCOM

チラシ等デザイン協力

新田看板工芸

DVD・CD作成協力

清水バンド、及川 信之

フォトサポート

秋山 薫

会場提供・協力

伊東 信(石森地区)、伊東 詳子(石森地区)、日野 ふさ(石森地区)
日野 美喜子(石森地区)、山崎 まち子(石森地区)、
石ノ森章太郎ふるさと記念館、㈳とよま振興公社(みやぎの明治村)、
㈱みなみかた町振興公社(みなみかた花菖蒲の郷公園)、
登米市体育協会(諏訪公園)、登米市歴史博物館、登米祝祭劇場

作家アシスタント

Mariana Cruz(クルズ ディエズアシスタント)
市野 玲子(市野泰通アシスタント)
伊勢 文夫(小林はくどうアシスタント)
小林 まどか(小林はくどうアシスタント)
青山 光江(松宮喜代勝アシスタント)
松島 雅雄(松宮喜代勝アシスタント)
守屋 ひろみ(守屋光彬アシスタント)
椎木 守(中川猛アシスタント)、藤森 恵(中川猛アシスタント)
小林 拓矢(中川猛アシスタント)、リュウシュン(高山登アシスタント)
村山 耕二(畠山敏アシスタント)、安部 朝美(関本欣也アシスタント)
鹿野 まち子(妹尾直紀アシスタント)
LUIS MOLINA(イネスシルバアシスタント)

実行委員会組織図

実行委員会が決定機関。多岐にわたる各プロジェクトを部会がとりまとめることにより
機動力ある組織となり、より円滑な運営が図られました。

登米アートトリエンナーレ実行委員会

総　会
会則の制定・改廃、事業計画、予算決算等

役員会
重要事項の審議

アドバイザー
（各種助言）

企画運営会議（毎週木曜日午後開催）
企画運営の詳細協議

部　会

総務・企画部会
- ▶事業細部の企画、立案調整
- ▶各部の統括と全体の進行管理
- ▶参加作家との調整
- ▶制作作品材料の調整
- ▶スタッフへの連絡調整
- ▶サポーターの募集と計画
- ▶イベントの企画調整
- ▶記録(写真/文章)

イベント部会
- ▶インフォメーションセンター設置／案内
- ▶ミュージアムショップの開設
- ▶関連イベントの企画／実施
- ▶まちかど演奏会
- ▶ワークショップ　他

交通・環境整備部会
- ▶会場提供者との調整
- ▶作品材料の調達、運搬調整支援
- ▶周回バスの運行調整
- ▶会場駐車場の安全管理

広報部会
- ▶PR計画の策定
- ▶告知活動
- ▶マスコミ等への周知活動と対応
- ▶図録作成（制作記録及び編集）

作家サポート部会
- ▶海外参加作家の世話（食事・送迎他）
- ▶宿泊施設の調整
- ▶通訳ボランティア

制作アシスタント部会
- ▶制作アシスタント計画

おもてなし部会
- ▶作家へのもてなし（ホスピタリティ）
- ▶国内参加作家の世話（食事・送迎）
- ▶宿泊施設の調整

事務局
実行委員会全体の連絡・調整・運営

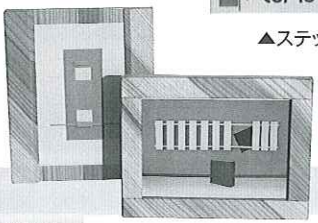
サトルサトウアートミュージアム友の会

登米アートトリエンナーレミュージアムグッズ

石ノ森章太郎ふるさと記念館内のミュージアムショップ

ロゴや幾何学アートをモチーフに登米アートトリエンナーレのためにデザインした「ミュージアムグッズ」の一部を紹介。
ロゴを生かしたユニークなデザインは登米アートトリエンナーレのオリジナル。ミュージアムを代表する作品をプリントしたクリアファイルは人気商品のひとつでした。これらは会期中、展示5会場で会場サポーターによって販売されました。

▲ステッカー 長方形 ¥100　正方形 ¥50


▲フォトフレーム(2種類)
¥800

▲トリエンナーレTシャツ(M・L)
¥2,000

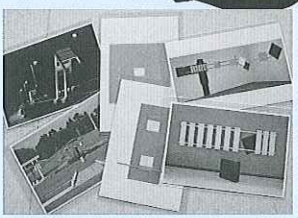
▲手ぬぐい ¥800

▶トートバック
¥2,000

▲コーヒーカップ(限定品)
¥2,000

▲クリアファイル(A5版) ¥300

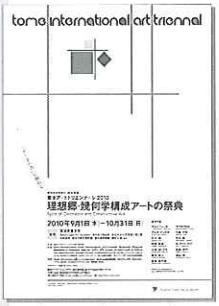
▲缶バッチ(1個) ¥100
3個セット(3種類) ¥300


▲ポストカード1枚(6種類) ¥150
3枚セット ¥300

▲携帯ストラップ(赤・白・黒) ¥500

ポスター、告知、リーフレット

2サイズのポスターと30種類を超えるチラシを作成、展示会場と周回バス停留所には看板とのぼりを設置し幅広く広報しました。



▲ポスター(A1・B2)

▲チラシ(A4両面)

▲スタンプラリー用紙付ガイドマップ(A3二折)

▲市内道路・展示会場に掲示したのぼり

▲会期中に各会場で配布した案内図

▲車用マグネット

▲期間中大活躍したトリエンナーレ1号・2号

▲CD

▲DVD

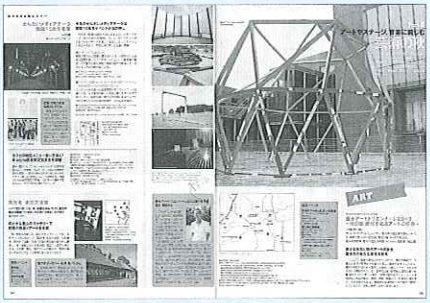
広報（メディア）

永年の市民の想いがついに実現し開催された「登米アートトリエンナーレ2010」は、さまざまな場面でメディアにとりあげられました。
これまでなじみのなかったトリエンナーレという言葉は次第に浸透し、市民ひとりひとりの情熱によってなしとげられたことが誇りとなり次へつながる貴重な力となりました。
女性誌や旅行誌では、登米市のまちなみや自然の新たな魅力を演出する「アートの旅」のおすすめの地としてとりあげられたり、特集が組まれ数多く紹介されました。
市外・県外では登米市というと「トリエンナーレを開催したまち」と言う人々が多いという嬉しい情報も入ってきました。

▲OZマガジン8月号掲載（P82）

▲朝日新聞
2010年9月4日（土）
掲載

▲「りらく」2010年10月号 掲載



▲「せんだいタウン情報S-style」
2010年10月号掲載

さまざまなメディアにとりあげていただきました

新聞

平成22年
6月 5日(土) 河北新報「幾何学アート世界から集まれ!」
トリエンナーレ2010
6月13日(日) 大崎タイムス「街をキャンバスに 幾何学構成アートの祭典」
7月 3日(土) 大崎タイムス「幾何学アートで町を活性化」
ボランティア養成講座
7月 6日(火) 河北新報「幾何学アート展 運営支援を研修」
ボランティア講座
7月20日(火) 仙北郷土タイムス
「登米アートトリエンナーレプレイベントの紹介」
7月21日(水) 河北新報「図形のアート 大きく大胆に」出前授業
7月29日(木) 朝日新聞「登米で現代美術の祭典」
7月31日(土) 河北新報土曜版「現代芸術の魅力体感」祭典9月開幕
8月 4日(水) 河北新報「幾何学 描けばアート」登米で国際芸術展プレ企画
8月16日(月) 大崎タイムス「親子で幾何学構成の立体造型を」
親子ワークショップ
9月 2日(木) 河北新報「幾何学アート間近に」市内7ヵ所で公開制作
9月 3日(金) 大崎タイムス「登米アートトリエンナーレ始まる」
9月 4日(土) 朝日新聞「幾何学アート街に次々出現」
登米アートトリエンナーレ開幕
9月 6日(月) 共同通信社「幾何学アート展」
愛媛新聞(9月9日)信濃毎日新聞(9月25日)ほか全国各紙に配信掲載
9月12日(日) 河北新報「登米トリエンナーレ12,19の両日に作家らトーク」
9月20日(月) 仙北郷土タイムス「登米市内がキャンバスに」
登米アートトリエンナーレ開催中
9月22日(水) 河北新報「低予算でも力作ぞろい」
幾何学アート登米トリエンナーレ開幕
9月22日(水) 河北新報「宮城発の美術運動に」
9月28日(火) 河北新報「作品を共同制作アートを楽しもう」登米・来月2日
10月 9日(土) 河北新報土曜版「街が舞台 芸術身近に」
登米アートトリエンナーレ・31日まで
10月10日(日) 朝日新聞「理屈でなく、体で感じて」
幾何学アート根には古里の色
10月22日(金) 河北新報「映像とダンス 融合アート体験を」24日登米
11月 6日(土) 河北新報「アート全身で」登米・石森小ワークショップ
11月11日(木) 大崎タイムス「芸術気分でアクション ペインティング」
11月20日(土) 大崎タイムス「本当の星のよう」プラネタリウム製作
12月11日(土) 朝日新聞「登米トリエンナーレサポーター感謝のつどい」
3年後も仲間に
12月17日(金) 大崎タイムス「成功の労苦ねぎらう サポーター感謝のつどい」
平成23年
2月20日(日) 河北新報「揺らめく炎に地球環境思う 登米キャンドルナイト」
2月20日(日) 大崎タイムス 土を掘って「地球と握手」
2月22日(火) 大崎タイムス「優しい光 キャンドルナイト」

テレビ

8月30日(月) ミヤギテレビ「OH!バンデス」駅前中継
8月31日(火) 仙台放送「スーパーニュース」
9月10日(金) ミヤギテレビ「OH!バンデス」
9月22日(水) 東日本放送「スーパーJチャンネルみやぎ」
11月 1日(月) 東日本放送「スーパーJチャンネルみやぎ」

ラジオ

8月31日(火) 17:45頃～／H@!FM「H@!STATION」
歓迎レセプション会場から中継
9月 1日(水) ～3日(金)11:30頃～／H@!FM「しゃべらいんラジオ」
収録現場・製作現場から中継
9月 4日(土) 10:00～10:30／H@!FM「飛び出せ!放送委員会」
市内の小学生による作家へのインタビュー
9月 4日(土) 10:30～13:00／H@!FM「ピンスポ!」会場から中継
10月16日(土) 18:00～／Date fm「RADIO Kappo 仙台闊歩」
他、H@!FMにて随時番組内でのイベントの告知など放送

雑誌

▶月刊誌「OZマガジン」8月号(7/12発売)特集:アートを感じる旅へ 掲載
▶Webマガジン「artscape」アートスケープ(9/1号) 学芸員リポート
▶「リゾート物件情報 秋号」注目のアート情報コーナー
▶「PARFUM」(9/20発行)
▶「VIDEO JOURNAL」(9/20発行)
▶月刊誌 せんだいタウン情報「S-style」(9/25発売)
▶月刊誌 「りらく」10月号(9/28発売)
▶隔月誌 「Kappo」仙台闊歩11月号(10/5発売)

冊子

▶まちねっと7/8月号
▶宮城県美術館協力会発行「アリスの庭」10月号
▶まちねっと9/10月号
▶東北文化の日2010
▶「伊達な旅」キャンペーン ガイドブック
▶Will 朝日ウィル
▶仙台っこ 秋冷号

広報とめ

▶6月19日号 ▶9月 1日号
▶7月 1日号 ▶9月21日号
▶7月21日号 ▶10月1日号
▶8月 1日号 ▶11月1日号
▶8月21日号

その他

▶「県政だより」9月号
▶NTT東日本メルマガ
「先取り!!フレッツ」9月3日配信

協賛

ご協賛いただいた企業・団体

東北電力(株)栗原登米営業所	ネッツトヨタ仙台株式会社	株式会社太田組
上杉皮膚科医院	宮城石灰工業株式会社	株式会社高田商店
株式会社ココム	株式会社七十七銀行	四季食彩 野の花
株式会社 関・空間設計	株式会社ヤマサ	ドコモショップ登米店
(株)ジョイショッピングプラザ	新田看板工芸	株式会社毎日広告社仙台
みやぎ登米農業協同組合	ヤマモト木材有限会社	有限会社加藤工務店
熊谷燃料住設株式会社	ホテルサンフレックス	株式会社スズキ自販宮城

リカーショップ とめ 水の里店 田口酒販株式会社	長沼温泉 ヴィーナスの湯 長沼温泉ヴィーナスの湯	人と自然へのやさしさをもとめて 伊豆沼農産 有限会社伊豆沼農産
Leaf YAMAMOTO Yamamoto-Oil Service Station ヤマモト石油 本 有限会社ヤマモト石油	KWP 川内印刷株式会社 川内印刷株式会社	たくさんの 個人の方々からも、 ご協賛いただいております。 ありがとうございました。

布施歯科医院	エンドー綜合事務所	株式会社 清建	株式会社 大伸建設
佐々木陶器店	山田運送株式会社	佐藤裕也眼科医院	とよま観光バス株式会社
株式会社ヤマダ地所	朝日精麦株式会社	佐沼交通株式会社	株式会社渡辺土建
有限会社小野寺重機	株式会社渡辺商事	宮石運輸株式会社	有限会社お食事処ポスト
登米市管工事業協同組合	有限会社山内建設	株式会社菅原屋	株式会社イシケン
株式会社誠香社	株式会社とめ葬祭	株式会社豊澤建設	有限会社新中田観光
泉田油店	及川被服株式会社	阿部石材店	八木小児科医院
株式会社割烹くまがい	有限会社日下公三郎商店	焼肉　八幡	佐々木精米工場
オイカワ写真館	有限会社鈴木自動車	東海亭	氏金
レストラン花蓮	有限会社佐々木電気工事		

ご協力

登米市 登米市	TOME CITY BOARD OF EDUCATION 登米市教育委員会 登米市教育委員会	石ノ森章太郎ふるさと記念館 石ノ森章太郎ふるさと記念館	登米祝祭劇場 水の里ホール 財団法人 登米文化振興財団
登米市観光物産協会 (社)登米市観光物産協会	H@!FM 株式会社登米コミュニティエフエム	仙台牛レストラン 牛トピア みなみかた 牛トピアみなみかた	遠山之里 とよま観光物産センター 遠山之里
登米市歴史博物館 レストラン蓮房	Satoru Sato Art Museum サトル・サトウ・アート・ミュージアム		

登米市市制施行5周年記念事業

理想郷・幾何学構成アートの祭典

登米アートトリエンナーレ2010

Spirit of Geometric and Constructive Art

tome international art triennal

頒布元　サトル・サトウ・アート・ミュージアム友の会
登米市中田生涯学習センター内
〒987-0602 宮城県登米市中田町上沼字舘43番地
TEL.0220-34-8083　FAX.0220-34-8084
振替／02250-2-117045
http://www.satorusato-artmuseum.jp/

頒　価　1,000円（952円+消費税）

編　集　登米アートトリエンナーレ実行委員会
http://tome-arttri.com/　E-mail:tome.arttri@gmail.com

デザイン　ブレーンハウス川内株式会社

印刷・製本　川内印刷株式会社

写　真　登米アートトリエンナーレ実行委員会

写真提供　市野 泰通、高山 登、中川 猛、守屋 光彬、佐藤 達、伊藤 俊郎、森田 峯男

発行日　2011年3月31日　第1刷

©登米アートトリエンナーレ実行委員会
printed in Japan

乱丁落丁の本がございましたら、お取り替えいたします。
なお、作家制作作品に係る著作権は、
登米アートトリエンナーレ実行委員会に帰属します。